

編集室から

イーハトーヴと宮沢賢治が名づけた岩手県花巻。訪ねるにつけ、この地域の豊かさが少しずつ伝わってくるようです。

東北には湯治場が多くあります。新幹線の車内誌に賢治が愛したと紹介されていた花巻の鉛温泉を昨年、訪ねました。この温泉は、市街から西に車で半時間ほど山間に入った処にある一軒宿の温泉です。宿は、通常の観光客用の旅館部と、湯治客用の湯治部に分かれており、玄関も別になっています。

湯治部には、自炊用の炊事場があり、硬貨を入れるとガスが出るコンロや電子レンジも備えています。売店も数店舗あり、人懐こそうなお婆ちゃんがお客を待っていました。旅館部は文人も泊まった立派な客室もありますが、湯治部は至って質素です。コタツを出すと、一杯になってしまう狭い部屋が何故か落ち



着きます。鉛温泉の名物は、白猿の湯。講堂のような中の湯船は深く、立って入ります。別に川べりにも露天風呂がありました。客室の足元を流れる川のせせらぎを聞きながら、本当にのんびりと過ごす事ができました。



表紙の写真は、鉛温泉から花巻市街に戻る途中のワンシーンです。朝日に照らされる晩秋。黄金色に輝く一本の銀杏。それは、衆生の中で真っ直ぐに天を目指し、光り輝く存在のようにも感じました。(は)



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2010/11
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp



2010/11
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

霜 月



賢治の愛した秘湯鉛温泉近郊にて
(岩手県花巻)
by hama

寄稿『エコツーリズムで地域振興を』

(株)ぶなの森 高峰 博保

三十年目の新たな展開

二十五才の時、八年暮らした東京を離れ、金沢に来て三十年です。最初に仕事をしたりクルートでは、人材の地域移転に社会的意義を見いだしていました。しかし、フードピア金沢のスタートとともに、二十八才で事務局となり最初の二年間、仕事をさせていただきました。どのような事業になるのか、よく分からないまま、何とか事務局をつとめていました。一定の評価をいただいていたが、二年で退職し、フードピア金沢を企画し推進していたグループヴィに移り、二十五年たちました。この間、民間企業のお手伝いをする一方で、石川県の一次産業の振興プロジェクトに参画、中山間地域の地域おこしマイスターとして県内各地の地域振興の勉強会にゲストとして参加、さらに、地域づくり協会のコーディネーターとして、各地の地域づくり団体のお手伝いにお邪魔し、全国のいくつかの地域に継続的に邪魔してききました。

地域づくりの基本は産業振興、仕事づくり

二十年以上地域づくりに関わってきた一つの結論は、産業振興、仕事づくりを進めることで、持続可能な地域形成を目指すことが基本であるということです。能登半島地震の後に能登各地を回る中で、痛切にそのことを実感しました。それで、二〇〇八年春から能登町に事務所を構え、エコツアーの事業化に向けての準備を始めました。初年度は、「能登ふるさと博」の一つの事業として「能登人と過ごす能登時間」をとりまとめ、その事務局として、いくつかのプログラムをサポートすると同時に、地元の古老にお手伝いいただき、「鉢伏山のブナ林散策」を実施しました。二年目の昨年春からは、専属スタッフとして、埼玉県大宮からインターンしてくれた山崎氏がスタッフとして加わり、今年の春からは、金沢の一名を加え、二名体制となり、本格的にエコツアーの事業化に取り組み始めました。

濱のしづやき 『ある集い』

先日、ある方の十回忌の集いが東京で開かれた。私自身は、その方が亡くなった後、知人から講演テープを十本ほど貰って知った。驚くほど新しい切り口で語られるその内容に、擦り切れるほど何度も繰り返し聞き入っていた。

縁あって、その集いに参加させていただいたが、直接教えを受けた方はかりでなく、私のように亡くなった後、ご縁ができた方も少なからず参加されていた。

同じテーブルの席同士になった方は、いずれも生前直接お会いされていた方がかりだった。そのお一人の向島さんは、藤枝で無農薬・有機肥料でお茶を栽培されている茶匠さん。ご主人を早くに亡くされ、息子さんとお店を経営されているとのこと。今でこそ時代が求めるお茶栽培方法も、当時は異端としてかなりのご苦労をされたのではないかと拝察していた。ところが、本当の苦労をされた方は、多くを語らないし、苦労をしてこられた風がほとんどしない。上品な笑顔で静かに語られるお姿からは、とても「かつて」を想像する事はできない。丸い緑色の笑顔のイラストが溢れるお名刺を頂戴した。次回、静岡にご縁があるときには、是非お訪ねして、お茶に籠めた思いを伺いたいと思う。

新会社の設立

そして、より事業化を促進するために、平成二十二年秋に新会社「株式会社ぶなの森」を設立し、能登での事業に關わっていた五名が異動し、ツーリズムをメイン事業と位置づけ、能登を主なフィールドに事業を深化・発展させることに取り組み始めています。社名の「ぶなの森」は能登で展開しているエコツアーが鉢伏山のブナ林を舞台にしていることを分かりやすく伝えることをまずは意図しています。さらに、ブナ林は水源涵養機能が高く、再評価されていますので、地域の人々の水源たらんとすることもイメージしています。成長が遅く、役立たないと、里山エリアのブナの多くが切られてきた歴史がありますが、違う視点から評価されることで、価値が見直されています。そのように、新たな視点で地域資源を見直し、価値創造に貢献することを目指したいと考えています。

地域内連携を

地域振興のためには、雇用の場になるような事業を創出することが優先課題であり、そのモデルをつくるべく、エコツアーを軌道に乗せることを当面の最優先課題として、仕事をさせていただきたいと考えています。鉢伏山をフィールドにした森歩きのエコツアーを始め、地域資源を活かした新たなツアーの企画実施も試みて参ります。能登では海を舞台にしたダイビングやカヌー、カヤックでの島巡りなどのプログラムも行われています。そのような先行する事業体とも連携しながら、地域内でのツーリズムの定着を進めて参ります。一方で、ホテルや旅館、民宿との連携を有効であると考えています。お互いにお客様を紹介しあえる関係が理想です。理念や理想を追求し過ぎかもしれませんが、地域の未来開発のために不可欠な活動です。ほどほどに頑張りますので、継続的なご支援、ご協力をよろしく願っています。



【プロフィール】(たかみねひやす) (株)ぶなの森 代表取締役。昭和三十年富山市生まれ。中央大学法学部卒業。日本リクルートセンター、フードピア金沢開催委員会事務局を経て、(株)グループヴィに。平成二十二年九月(株)ぶなの森設立。

お隣の席になった方は、都内で手織りをされている豊田さん。この方も笑顔が素晴らしい。私の母が手芸をよくしていたためか、手づくりの風合いの良さには目が無い。お召し物は果たしてご自身の作とのこと。失礼ながらしばし見入ってしまった。やああってお手元から一葉の写真はがきを出された。それは、個展の御案内状。谷あいの小川のためと、杉の幹に作品が掛けられた写真。せせらぎの音と、森を抜ける風に作品が揺らめいているかのようなカット。これほど、この国の自然環境とマッチした作品をご覧に入れられないのが残念だ。

地域づくり、村おこしという。が、これらは地域や町・村全体を挙げて何かをするばかりではない。今回の集いでご縁を頂いた方々のように、何かに秀でた人、何かをひたむきに目指す人の存在から、全てが始まる。その志の透明で真つ直ぐな故に、人々の共感が拡がり、やがて時代の風が吹く。出逢った方々の思いの中に、改めて原点を觀る思いがした。

時代は急激に変わっている。しかし、その足音は静かであるがために、気づかぬままに過ぎてはいまいか。こんな時であるからこそ、自らの志を磨きたい。万一、確たるものが無いならば、それを持つ人を応援すれば良い。帰途の夜行バスは、丸の内・行幸通りから出た。美しく整備された街に、人通りはほとんどない。落ち着いた光に彩られた街並み。流れる車窓を眺めていた。

『 iPad買っちゃいましたのその後のその後 』

(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

そもそも、僕が何でiPadを買おうと思ったのかと言うと、3月にiPhoneを買ってその威力のあまりの素晴らしさに驚いたからだ。でもって、何でiPhoneを買ったのかと言うとtwitterとやらをやってみたいと思ったからだ。

正直言うと、僕はあまり熱心なtwitterユーザーではない。3月下旬からやり始めて、今日(10月24日)までの7ヶ月間での総つぶやき数は246。一日平均1.2つぶやきという自慢にもならない利用状況だ。フォロー(気になる人のつぶやきをチェックする対象者)している数は277人。フォローされている(僕のつぶやきをチェックしている)人は170人。

twitterの真の力を利用している人は、フォロワーを万の単位で持っている。僕がフォローしている有名人で言えば、孫正義64万人、ホリエモン54万人、田原総一郎13万人、茂木健一郎11万人という具合だ。最近の週刊誌の発行部数は50万部もないだろうから、孫さんやホリエモンは週刊ポストや文春なんかより影響力を持っていると言える。

こういった人たちに比べれば、僕のフォロワー数170人と言うのは、発信するツールとして考えたならば全く話にならない。しかしtwitterを情報収集ツールとして考えると、これは結構な力を発揮してくれる。情報感度の高そうな人を、バランス良くフォローしておけば、新聞やテレビよりずっと早く、的確に情報収集することができる。大体、新聞にしても、テレビにしても発信している情報は、何らかの意図に基づいて編集されている。だから必ずしも事実を報道している訳ではない。

だから、政治家、学者、評論家、マスコミ人、弁護士などなど左右バランス良くフォローしておく、なるほど裏はそうなっているんだ・・・。と思うことがしばしばある。

それと、時折昔の仲間を発見し、その仲間がフォローしている人の中から、これまた懐かしい友人や先輩、上司などを発見することがある。それでとりあえずフォローしておく、これがきっかけで再び縁が芽生えてくる。先日も上海で活躍している元同僚からメールが来たり、26年前の新人時代の直属の上司から、夜中に電話がかかってきたりした。twitterがないと、こんな縁は絶対にできないものだと思う。twitterを利用して、ビジネスチャンスを広げるのは案外たやすいことのように思える。

とはいえ、twitterは知っていても、twitterをやっている人はまだまだ少ないと思われる。たぶんまだ15%程度というのが現状だろう。

みなさん四の五の言わずに、twitter早めにやり始めた方がいいですよ。

『 人口オーナス化時代では労働力不足が起きる? 』

SOS代表 川畠 嘉浩

皆様こんにちは。またまた最近の私の身の回りに起きたトピックスを基に、日本社会について勝手に考察してみようと思います。実は9月29日に第一子が生まれました。2860グラムのちょっと小さな女の子で名前は「一葉(いちは)」と名付けました。名前の由来については語ると長くなるので止めておきますが、「日本女性らしく、かつ凜とした人生を」という願いを込めました。

そんなうちの娘が大人になる頃の日本経済はどうなっているのだろうか?とここ最近思う事が多くなりました。それ以前に地球環境は?ということも気にはなりますが、考え始めると気が滅入りそうなのでテーマは「日本経済」とさせていただきます。現在の日本経済を取り巻くキーワードと言えば、「デフレ経済」「円高による輸出型産業の衰退と中小企業の相次ぐ倒産」「少子化による内需縮小」「GDPが中国に抜かれ世界3位に」「就職難による失業率増加」などなどマイナス要因の言葉ばかりが新聞の見出しを飾ります。うーん、これでは娘の将来はどうなるんだ?それ以上に私は娘を食べさせていけるのか?と不安になってしまうものです。しかし、ここであえてポジティブ思考になるために、プラスの素材を探してみようと思います。

「実は世界不況下でも伸び続ける貿易黒字」「一人当たりのGDPは伸びている」「少子化により労働力不足が起きる」「中国の富裕化は日本経済に大きな富をもたらす」など、実は日本経済の将来について政策や対策をよりフォーカスしていくことで、十分に元気を取り戻すチャンスはあるという説を唱える学者やアナリストは実多く存在します。

特に労働生産人口の減少が数的に明らかな中で、今からは想像つかないかも知れませんが必ず労働力不足は起きるのです。そこで日本経済を支える人材が、「元気な高齢者」「女性」です。高齢者の就労率は既に先進国内でも最も高く、これ以上の伸びについては個々人のQOLに関係してくるためそう期待できるものではありません。一度結婚もしくは出産・育児で仕事から遠ざかっている女性の労働資本を市場に組み込む必要があります。日本は特に他先進国と比較して「女性の管理職比率が低い」「男性と比較して賃金が低い」という昔からの日本の悪しき雇用慣行が未だ残っております。このような旧態依然とした体質を改善するためには、今後の政府の政策はもとより、現在の日本経済を支えている企業人(男性)の意識改革が求められます。

元来、男性よりも女性のほうが優秀と相場は決まっております。歴史を振り返っても英雄の背後には、聡明な女性の存在があります。私が教えている大学の学生を見ても、女学生の強かさや柔軟さには毎日驚かされます。

あと実は昔から女性は肉食で、男性は草食だったのかも知れませんが、これまで縁の下で力持ちだった女性達が、どんどん表舞台に立ち男性達が顎で使われるという時代はすぐそこまで来ています。

私の娘「一葉」が私の仕事に共感してくれて、是非とも同じフィールドで一緒に仕事ができればなあと淡い期待を抱きます。テキパキと社員の男性達を仕切っていく姿を想像してます。ただ、その仕切られている一人に私がない事を祈ります。

日常の風景に美術作品を置く。その事を通じて私たちの町並みをもう一度見直す。そして作家さんたちと語らう。単なる個展ではなく、さりとして学術的なだけの催しでもない。この本物志向の遊び心こそが、「文化展」の晴れ舞台を目指すもの。と主催者である遠州横須賀倶楽部の本イベントの仕掛け人深谷氏は言う。



名づけて「遠州横須賀街道ちっちゃな文化展」。場所は静岡県掛川市内で旧大須賀町の横須賀地区。城下町の風情を残す「遠州横須賀」の町並みまるごと美術館に仕立て、古い町屋、空き家などの玄関先、部屋の一室を借りて美術品を展示していくのだ。

今年は10月22から23日にあり、すでに12回を数える。始めた頃の「ちっちゃな」は「でっかな」に成長した。会場は77箇所にも上る。毎年毎年、会場数もいりこみ客数も増えていく。主催する遠州横須賀倶楽部の熱意が、そして作家や来客との交流が何よりも面白いからなんだろう。

京の町屋に比べれば相当見劣りするけど、アートが入ることで光を放すようになる。美術館でもないただ普通の多少くたびれてきている民家にアートを組み入れることで、生き生きとした空間になる。町並みも華やいで



見える。このことが横須賀倶楽部の連中が言う「町並みをもう一度見直す」ってことなんだなって気づくのである。この12年間の成果あって、町並みを意識した外観の家が年々増えてきている。

さらに連中は「人が大勢集まる「場」だけに、表面的な賑やかさに気持ちも流れがちだけど、せっかくの「文化展」だから小粋に楽しみたい。何が小粋なのか、の答えはあなたが培ってきた人生観の中にきっとあるはず。」とも言う。歴史を味方につけた、この町並み美術館には確かに随所に「粋」がある。それを感じに来年秋に遠州横須賀にお出かけいただきたい。



待ちきれない人は4月第一週の週末にある「三熊野神社大祭」がお勧めだ。江戸天下祭の流れを汲む13台の祢里（ねり＝山車）が、三社祭礼囃子の名調子によって、城下の町並みを練り歩く。祢里の上では「ひょっとこ」や「おかめ」が面白おかしく舞い踊り、江戸町火消しの装束に身を固めた若衆が、「したした」の掛け声をかけながら、右へ左へと杵を振りながら曳きまわしてゆく。これまた大変見ごたえがある祭りである。

文化展から帰り、我が家の居間に立つと年がら年中同じ絵、床の間の軸も季節に合うものにしなくては。

あああ。

